

(昭和四十年 七月発行)

「人間の尊さ」

この靈妙な働きのある身體は一体誰が造られたのであるか。科学者は人間の起源を微生物の進化とみているが、大自然の力によって生みなされた小生命體であるが、それはまた小宇宙をなしているのである。地上には三十二億の人間が現在生存しているが、同じ顔は一つもなく、三十二億(当時)の人間がそれぞれ異なった容貌をしている。これは自然の大芸術によるのである。大自然の人間生命に與えられた造化作用の神秘というのほかはない。

一個のこの肉體にも、他と同じように與えられている生命の分派を感じる。さらに肉體に宿っている大自然の御意(ミココロ)即ち宇宙大精神の流れを感じる。この神秘的なる事實を感じるものは倖せである。この尊い事實から人間の尊さが身にしむのである。如何に人間の本性・本体を力説しても、この尊い事實を感じ得ないならば無意味である。人間の生命は決して目に映る形だけの生命ではなく、大生命の分派としての生命なのである。